

自産自消ができる国へ vol.84

『野菜作りで起こっていることを言語化する』

文 西辻 一真 text by Kazuma Nishitsuji

「マイファームつくる通信」が発刊されて2カ月が経ちますが、この通信を通して私自身ひとつの気づきを貰いました。それは「言語化」という行為がこの農業界に如何に少ないかという事で、この少なさが農業界を閉鎖的かつ遠ざけられる存在にしてしまっているということでした。この言語化とは、もちろん農家のストーリーや農産物に対するこだわりなどの言葉もありますが、私が特に感じたのはそれではなく「感動や喜びや不安や嘆き」を言葉にすることです。

例えば家庭菜園をしている人がもつとその楽しさを表現して誰かに伝えたり、農業をしている人が突風にやられてハウスが倒壊した嘆きを言葉にするということ。それがもつと表面化してくれば、それに呼応してコミュニケーションが発生して困った時には助けに行ったり、喜びに共感して笑顔になったり、伝え聞いてまねてみたり、ということが繰り返されていつの間にかその「コト」に関わる人たちの数が増え、爆発的に大きくなります。ここに農業再生の「鍵」と自産自消ができる社会作



Profile
82年、福井県生まれ。京都大学農学部卒。広告会社に勤務後、07年9月にマイファームを設立。都市部の耕作放棄地を体験農園として貸し出すビジネスを始める。

株式会社マイファームの取り組みはこちら
公式サイト: <http://myfarm.co.jp/>
フェイスブック: <https://www.facebook.com/myfarm.kyoto>
耕作放棄地を再生させる『体験農園マイファーム』: <http://myfarmer.jp/>
耕作放棄地を耕す人を育てる『アグリイノベーション大学校』
<https://agri-innovation.jp/>

りへの「鍵」があると私は強く感じています。実践している人たちがもつと「言葉」にして表現していけば自然に農業界が閉鎖的になってしまっているという問題は解決すると思っています。

「マイファームつくる通信」の発行にあたってスタッフが先輩農家のところへ取材に行ったときの感動を言葉にしたり、今月の種に関する勉強をして資料を集めて編集をしていきました。その姿に透けて見える農家の姿や種のことを頭で想像しながら最終校正をしていて「言語化」が大切だと感じました。

今の日本の農業がなかなかうまくいかない原因のひとつに、現場で農業をしている農家の皆さんが自分たちの仕事を子供に引き継がせない、世代交代ができていないということがあります。

この点も収益性云々の前に普段から「この仕事がなかったら食料がなくなるんだぞ!」とか「この仕事は大変だけど工夫次第でどんどん改善されていく素晴らしい仕事なんだ」ということを言葉に表して、子供に伝えていくことができているならば、もう少し時代が変わっていたんではないかと思えます。

回り回って今、農業をしたい若者が確実に増えているのは、農家の人からの伝承ではなく、逆に両親が農業をしていなかったため農業に対する思い込みの魅力を感じていたり幼少期の農業体験で得た感動などによるものではないかと感じます。そういった意味でも自然からの伝承で人間に役割が回ってきたよ!と自然からそういわれているような気がします。